

マラナ・タ

[導入]

おはようございます。この朝私たちは、この年の待降節・アドベントの第1主日を迎えることが出来ました。いよいよ、これから主イエス・キリストの降誕を待ち望む大切な季節が始まって行きます。

この朝も讃美歌 94 番、ひさしくまちにしを共に賛美いたしました。この賛美を歌うと、ああ今年もアドベントを迎えたのだなあという思いを強くさせられます。

アドベントは、主イエスの誕生を待ち望むとき、またそれを喜び祝う時ではありますが、やはり同時に、この1年を振り返る、そのような思いに駆られる時でもあります。

あと1か月程経つと私たちは2022年、この年の終わりを迎えます。果たして、この1年という月日を振り返る時、何が見えてくるのでしょうか。

そのようなことを思い巡らしつつ、今朝も主イエス・キリストの降誕の意味を聖書から、共に学んでいきたいと思えます。

[聖書朗読] 黙示録 22:10～21

22:10 また私に言った。

「この書の預言のことばを封じてはなりません。時が近いからです。

22:11 不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」

22:12 「見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。

22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

22:14 自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通して都に入れるようになる。

22:15 犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。

22:16 「わたしイエスは御使いを遣わし、諸教会について、これらのことをあなたがたに証しした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

- 22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。
- 22:18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。
- 22:19 また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。
- 22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。
- 22:21 主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。

[クリスマスと黙示録]

なぜ、アドベントに黙示録なのか？この朝、選びました聖書箇所は多くの方にとって不思議に思われるところでありましょう。私もクリスマスのメッセージを黙示録から語るのは初めてのことであります。

それでも黙示録の、しかも一番最後の 22 章を選んだのには、それなりの理由があります。答えを先に言いますと、神の民イスラエルが救い主・メシアの誕生を待ち望んでいたように私たちも主が来られるのを待ち望んでいるからです。

主イエスが誕生された時代、それはローマという帝国の支配を受けていた時代そして誰もが苦しみの中に置かれていた時代でした。もとよりローマ帝国だけではありません。

ユダヤの地は長らく列強の国々の支配を受け、輝かしいイスラエル王国の時代はすでにはるか遠くの話しとなっていました。それゆえユダヤの民はひたすらイスラエルの再興を、そしてメシアの到来を待ち続けていたのであります。

そして遂にキリストが誕生し、そこから大きく歴史が変わりました。キリストの公生涯があり、十字架の死と復活、それに続くペンテコステと教会の誕生。

教会はそこから爆発的にと言っていいでしょう。福音が増え広がり、救われたキリスト者の群れが次々に誕生していったのです。

同時に教会への迫害も次第に強く、大きく、拡大し、黙示録が書かれた時代、それはまさに教会が経験する最初の大きな試練となっていたのです。

迫害の時代に書かれたヨハネの黙示録。この手紙には主イエスキリストの再臨を待ち望む空気が色濃く反映されていると言って良いでしょう。

〔主イエスよ、来て下さい〕

22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

22:21 主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。

主イエスよ、来て下さい、という言葉。これはマラナ・タというアラム語を訳した言葉であります。マラナ・タ。それは、初代教会における挨拶の言葉であり、同時に聖餐式における祈りの言葉として用いられていたとも言われています。

なぜ主よ、来て下さいなのか。それは、迫害の時代であり、また大きな試練を経験していた教会にとって切実な祈りの言葉でもありました。多くのキリスト者が捉えられ、拷問を受け、また命を奪われ、殉教していった時代。

黙示録を記した使徒ヨハネの時代はまさに教会にとっての危機の時代でした。人々の苦しみが増し、悲しみが深まり、大きな試練に遭遇した時代。それゆえのマラナ・タであり、主の到来を待ち望む切実な祈りが献げられていました。

最初になぜアドベントに黙示録なのかという問いかけをみなさんにしました。それは、私たちもまた主を待ち望む、マラナ・タの切実な祈りを必要としているからであります。

22:10 また私に言った。

「この書の預言のことばを封じてはなりません。時が近いからです。」

22:11 不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」

ここに2つの対照的な人々が登場します。不正を行う者、汚れた者が存在する一方で正しい者、聖なる者の存在も忘れてはならない。この対照的な、両者の示すそれぞれの特徴がさらに深まっていくのだと言われます。

不正や汚れが、いよいよ激しくなっていく。同時に正しい者や聖なる者もその様相をさらに深めていく時代。あたかも光と闇が、それぞれになお一層強く、濃くなっていく時代だということです。

今年、2022年を振り返っていく時、もちろんこの年も実に様々な出来事や事件が起きてきました。私たちが住むこの日本の社会でも、どうしてこんなことがと思えるような凄惨な事件や大きな災害が起こってきました。

でも、私たちにとって何よりも大きな事は、今年の2月に現実のものとなったロシアによるウクライナ侵攻であったと言えるでしょう。軍事的にも政治的にも大きな影響力を持つ大国ロシアが隣国のウクライナに侵攻を始めました。それは文字どおりの侵略戦争と言える大きな大きな歴史的事件となりました。

いや、ウクライナだけではありません。昨年、2月にも大きなニュースが私たちのもとに飛び込んで来て、心揺さぶられる痛ましい事件となりました。それはミャンマーで起こった軍事クーデターでした。

さらにその前の年には香港での民主化運動が文字通り政治の力でねじ伏せられ沈黙を余儀なくされるという事態に陥りました。

ウクライナ、ミャンマー、そして香港から聞こえてくるのは、そこで血を流し自由や安全を奪われ、多くの大切なものを失った人々の悲しみの叫びです。

また為政者による宗教的弾圧や迫害もまた深刻さを増してきていると言います。今月、水曜礼拝では世界の迫害下にある教会とキリスト者のための祈りを献げてきました。

アフガニスタン、アルジェリア、インド、スリランカといった国々でキリスト教会に対する迫害が近年さらに深刻さを増しているという報告があります。迫害は過去の事ではなく、極めて例外的な国や地域のものでもないということです。

不正を行う者がますます不正を行い、汚れた者がますます汚れていく世界。これは、黙示録が書かれた1世紀末の話だけではなく、私たちが直面する世界の現実であり、私たちの生かされている社会のいまということです。

だからこそそのマラナ・タであり、主よ来て下さいとの祈りの叫びなのであります

[すぐに来る]

22:12 「見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。

最初のクリスマスに起きた事柄は、すべて預言者たちの口を通してあらかじめ預言されていた約束でもありました。羊飼いたちに告げられ、東方の博士たちに示されたのは約束のメシアの到来であり、その預言の成就でありました。

クリスマスは、その約束が現実のものとなり、神のひとりごが私たちの生きるこの世界に本当に来て下さったという良き知らせをもたらすものとなりました

しかし黙示録の書かれたヨハネの時代。その時、主イエスキリストは十字架の死から復活を成し遂げ、すでに天に帰られていました。弟子たちの見ている前で主は雲に包まれて、天に上がられたのです。

その時、弟子たちに向かって御使いたちがこう言ったのです。

「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」（使徒1：11）

また、おいでになる。再び来られる。この約束のゆえに、教会は、そして神の民は主の到来を待ち望むようになったのです。弟子たちだけではありません。迫害の最中にあった使徒ヨハネの時代もまた私たちも待ち望むのです。

救い主である主を待ち望む。それは神の民イスラエルが、メシアの到来を待ち望んだように、教会が2000年間ささげ続けてきた信仰の祈りであります。

クリスマスにこの地上に来られた主。その主なる神のひとり子、イエス・キリストの再臨を待ち望む祈り、それこそがマラナタの祈り、主よ来て下さいとの切実な祈りであります。

しかし待つという事は誰にとっても簡単なことではありません。なにごとにもスピードが求められる時代です。できるだけ早く、可能な限り、すぐに結果を出したい。私たちは確かにそのような社会に生かされています。

だからこそ私たちには待つ事の覚悟が求められるのです。待つ事の難しい時代だからこそ、私たちには、なぜ待たなければならないのか、どのように待てば良いのかといったことが求められるのではないのでしょうか。

主イエスが、ここで言われたのは「見よ、わたしはすぐに来る」という言葉。「それぞれの行いに報いるために、私はすぐに来る」という言葉でした。

同時に主が私たちに告げられるのは、主がどのようなお方であるのか、という事にあります。

[アルファでありオメガである]

22:13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

私たちは、誰でも良いから待つというのではありません。
どんな存在でもかまわないから早く来てくれ、というのでもありません。

私たちが待ち望むお方はどのようなお方であるのか？
なにゆえに私たちがその方をひたすら待つのかということにあります。

ここで主イエスはご自身を「アルファであり、オメガである」と言われました
英語のアルファベットがAから始まりZで終わるように、ギリシア後の初めのアルファであり、最後のオメガという文字。

それは字義どおりにとるならば、最初であり、最後である、ということ。初めであり、終わりであるということになるでしょう。

私たち人間にとって初めと終わりというのは誕生と死を指すことになります。
この世界に生まれ出た人間は、やがて、必ず死ななければならない。いのちの始まりは同時にいつの日にか終わりを迎える事になる。限られた命である。

ところが、私たちの待ち望んでいるお方は、有限ではなく、永遠にして無限の存在である。そして聖書がアルファでありオメガであると言う時、それは私達の主が全世界の創造者であり、完成者であるという事を示しているのです。

はじめに神が天と地を造られたと言う時、そこに全ての始まりがあるという事を私たちは知るのである。世界の始まり、歴史の始まり、生きとし生けるもののすべてがそこから始まったということ。

同時に真の支配者、まことの統治者であられる主は、世界を完成へと導かれるお方でもあります。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離してはならない、と言われる時、私たちは自分が不完全であることを自覚します。自らがまだ途上にある未完成のものであることを知るのである。しかし私たちが待ち望む主は、私たちが完成へと導かれるお方でもあります。

罪によってゆがめられた被造物世界、悪の力に牛耳られているように見える、世界の現実にあつて、私たちに完成の時が訪れる。主が私たちを贖い、新しく生まれたものとして養い、成長させ、やがて完成へと導いてくださる。

そこに待ち望む者の希望があります。
主を待ち望むことの大切な約束があるのです。

[明けの明星]

22:16 「わたしイエスは御使いを遣わし、諸教会について、これらのことをあなたがたに証しした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

この16節でも続けて主イエスの自己紹介がなされます。主イエスは、ダビデの根である、子孫である。そして輝く明けの明星であると言われるのです。

明けの明星というのは一般的にも知られた言葉だと思いますが、これは明け方の空にひととき美しく輝いて見える金星のことをあらわす言葉です。明け方、すなわち夜があける直前というのは、最も夜の闇が暗くなる時間とも言われます。その漆黒の闇の中に燦然と輝く明星（あかぼし）。明けの明星。そのように、ひととき明るく輝く星こそが主イエスキリストだと言われます。

最初のクリスマスが訪れたユダヤの地も重苦しい空気が時代をいろどっていました。暗い闇が世界を覆うような、そんな時代であったと言われていました。だからこそダビデの根であるメシアが来て下さった。闇に輝くあかぼしとして主が誕生してくださった。そして今、私たちも同じように主を待つのです。

闇が世界を覆い、悪の力がはびこるこの世界のただ中に、主イエスキリストが再び来て下さる。歴史を終焉へと導き、この世界を贖い、完成へと導かれる主が来られる。

そこに私たちの希望があります。だからこそ、私たちは下を向いてではなく、顔をあげて主を待ち望むことができるのです。

[希望を告白する]

22:14 自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。

22:15 犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。

主イエスは再び来られると同時に私たちのために都を用意してくださいます。自分の衣が洗われる幸い。そしていのちの木の実を食べる特権。その都に用意されるのはそのような恵みであると言われます。

アダムとエバが善悪の知識の木の実を食べた時、それ以来死ななければならないとの主のことばどおり、人はいのちを失ったのです。そして、主なる神は、そんな二人のために皮の衣で裸を覆って下さいました。

けれども主が用意して下さった天上の都において、私たちは皮の衣ではなく子羊の血で洗われた白い衣を着ることが許される。そして、いのちの木の実を食すことで永遠のいのちにあずかる。私たちはこのような約束の場所へと招かれている。だからこそ、私たちは主を待つのです。

1年の歩みを振り返る時、私たちは相も変わらず生活に追われて日々を過ごしたそのような事を実感として感じるのではないのでしょうか。何を食べ、何を着るのかという事に思い煩い、悩む日々を過ごした。生きていくための必要に不足を覚え、明日を案じて不安になった。

それは、もしかしたら来年もまた続くのではないか。いや、一生涯そのようなことの繰り返しではないか。そんなふうにも思えてくるのです。

しかし何を食べ何を着るのかを煩ってならない。そのようなことに心を奪われ心滅ぼすような日を過ごすのではない。主は私たちを神の国とその義を第一とする歩みへと導かれるのです。すべての必要が、添えて与えられる生き方へと私たちを招かれるのです。

そして同じ主が、やがての日に、洗われた聖い衣を私たちに着せてくださる。いのちの木の実を与え、永遠に主と共に過ごす場へと私達を導いてくださる。それが主の備えてくださる天上の都であり、それが私たちに与えられた確かな希望でもあるのです。

だからこそ私たちは、主を待ち望みます。
主が来て下さることを希望をもって待ち望むのです。

最後に私たちに与えられた主の語りかけのことばを聴いて、今日のメッセージを終わりにしたいと思います。

[預言のことばを]

22:18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。

もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、
この書に書かれている災害を加えられる。

22:19 また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、
神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の
受ける分を取り除かれる。

預言のことば、預言の書のことばについて書かれている。これは、文字通りにとるならば、ヨハネが記した黙示録の言葉を指しているのでしょう。ヨハネが見た幻、その幻を言葉にした預言のことばです。

けれども私たちは、これが聖書全体を、すなわち神のことばの全体を指していると読んでも差し支えないのではないかと思います。主から預かったことば主に託されたことば。つまり、神のことばとしての聖書全体を指している。

そしてヨハネは、その預けられた神のことばに何も付け加えてはならない、何も取り除いてもいけないと言うのです。なぜでしょうか？

それは、これが神のことばであるからです。歴史的に見るならば神の言葉は、まさにこのようなことのせめぎ合いであったとも言えるでしょう。

神のことばである聖書に人のことばを付け加えたいくなる誘惑があります。立派なあの人の言葉だから、偉大な誰その言葉であるから、だからそれを聖書と同じように扱ってしまう。神のことばとならべて聴いてしまう。それはまさに神のことばに何かを付け加える罪となるでしょう。

反対に神のことばである聖書を割り引いて聴こうとする誘惑もあります。ここは大切なところだが、あちらはそうでもない。これは私に必要なことばだが、あれは必要ではない。神のことばを色分けし、区別しようとする誘惑。

自分には関係がない、意味がないと見なして聖書に聴こうとしない態度。そのような姿勢にも注意をしなければならないでしょう。

結局のところ私達に求められているのは、神のことばを神のことばとして聴くそのような態度だと言えるでしょう。そして、これこそが終末の時代を生きる私たちに求められている信仰だと思うのです。

ヨハネ 1:1

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

最初のクリスマスに誕生されたのは、まさにことばとしてこの地上に来られた神であった。イエス・キリストこそが神が誰であるのかを説き明かし、神とはどのようなお方なのかを指し示す神のことばそのものでありました。

しかし人々は約束のメシアであるキリストに対して様々な態度を取りました。ある者はイエスは神ではないと否定し、退けようとしていました。またある者は、イエスこそがダビデ王の再来だと言って、間違った期待を押しつけようとしたのです。

神のことばであられるキリストから何かを差し引く事も付け足すこともしてはならないという戒めを私たちは改めて聴く必要があるのではないのでしょうか。

そして私達が主を待ち望むために、今こそ正しく神のことばに聴く必要があるのではないのでしょうか。

ヨハネは「この書の預言のことばを封じてはなりません。時が近いからです」とも言いました（黙示録 22:10）。

預言のことば、神のことばを封じてはならない。なぜならその時が近づいているから、その日が確実に迫っているからだと言います。

再臨の主を待ち望む、そしてクリスマスの主をお迎えする。そのために私たちに必要なのは神のことばです。神のことばに聴き、神のことばを味わい、神のことばに生きる。そんな歩みをこれからもさせていただきたい。

今日からアドベントが始まり、私たちは指折り数えながら、主の降誕を心から待ち望むのです。全く同じ思いをもって、私達は再び来られる主の到来を待つ者でありたいと願うのです。

クリスマスの主の祝福が、この年もみなさんの上にありますように。そして、来たるべき主の到来を心から喜んで待ち望む私達であることができますように

マラナタの祈りと共にこの年もまた主イエスキリストの降誕を待ち望むことができるようにとお祈りさせていただきたいと思えます。祈りましょう。

● 祈り
黙示録

22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

神様、今年もまた私たちはアドベントの季節を迎えることができました。本当に様々なことのあった1年でした。個人的にも教会としても、また世界を見ても、あらゆることが次々に起こり、私たちは戸惑いと驚きを隠せませんでした。

しかし、だからこそ私たちは改めて再び来られる主を待ち望む思いを強くしております。神の民イスラエルがメシアの到来を待ちわびたように、私達もまたこの時代にあって主イエスキリストの到来を待ち望むのです。

つらく悲しい出来事や問題による苦しみの中でアドベントを迎えた方もおられるでしょう。先の見えない不安や人知れず思い煩う悩みを抱えている方もおられることでしょう。

だからこそ私たちは祈ります。使徒ヨハネと共に主よ来て下さいとのマラナタの祈りを献げます。どうかこれからも主の約束の成就を待ち望む私たちとさせて下さいますように

インマヌエルの神、人となられた神、私たちの主、クリスマスの主、
イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします

アーメン

● 祝祷

クリスマスの主イエス・キリストの恵み
マラナタの祈りを聞き入れてくださる神の愛
世の終わりまで我らを導く聖霊なる神の導きが
救い主の到来を待ち望む一人一人の上に
豊かに限りなくありますように。アーメン